Roots of Japan

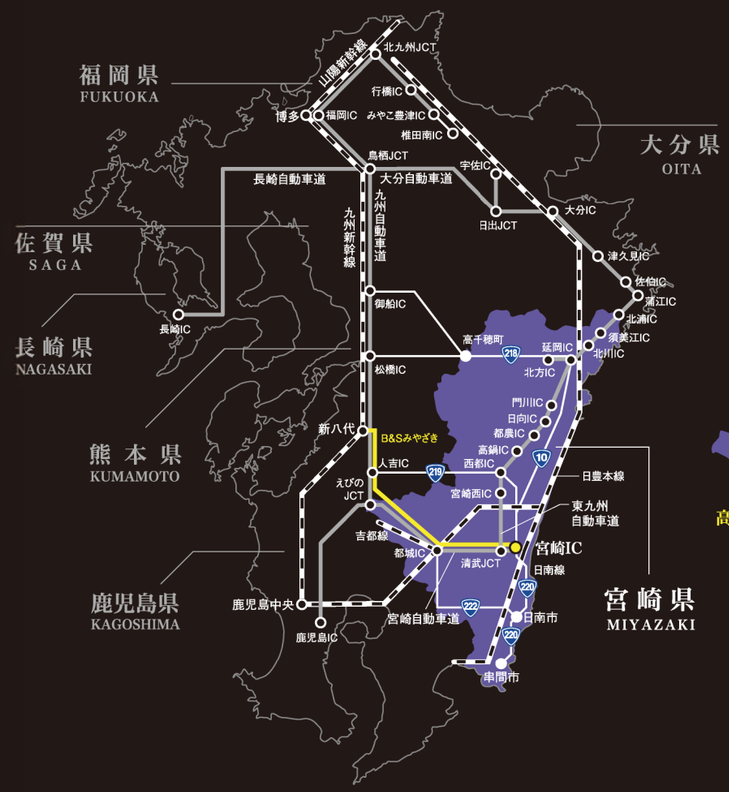
～神話の源流へ～

高千穂峰・天逆鉾

Roots of Japan

MIYAZAKI ACCESS-MAP

遥かなる神話の源流を求めて、宮崎へ。



空路（宮崎空港）

※季節により便数に変更があります。

路　線	所要時間	会社名
東　京 → 宮　崎	約100分	ANA・JAL・SNA
大　阪 → 宮　崎	約65分	ANA・JAL
名古屋 → 宮　崎	約80分	ANA
福　岡 → 宮　崎	約45分	ANA・JAC・IBEX

カーフェリー（宮崎港）

三宮（神戸港）

↑↓ 上り・下り 約12時間10分

宮　崎

JR特急

発着地	所要時間
小　倉 → 宮　崎	約4時間30分
大　分 → 宮　崎	約3時間
鹿児島中央 → 宮　崎	約2時間

新幹線＋高速バス（B&Sみやざき）

発着地	所要時間
博　多 → 宮　崎	約3時間

※2015年4月現在の情報です

※このパンフレットは、「一般財団法人空港環境整備協会」の助成を受けて制作しました。

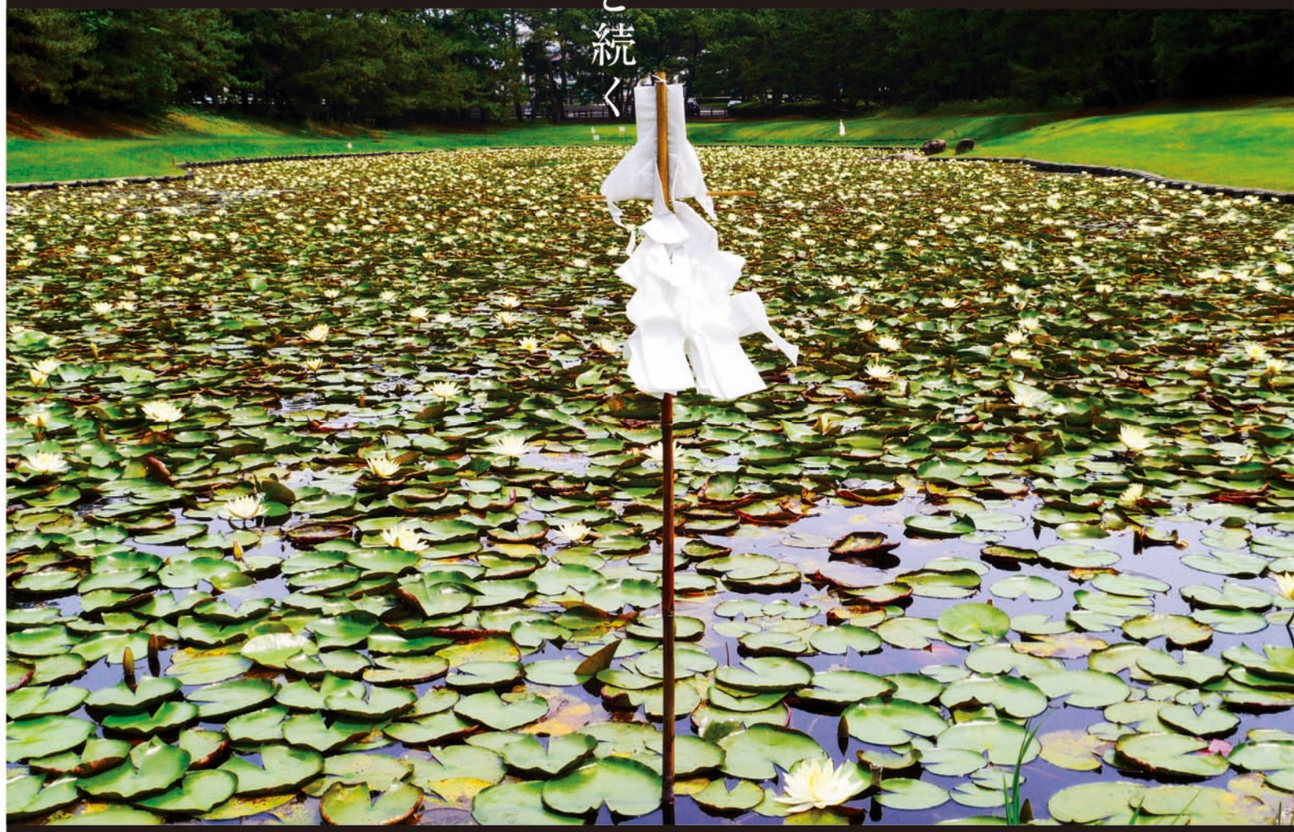
宮崎県商工観光労働部観光経済交流局観光推進課　記紀編さん記念事業推進室
〒880-8501 宮崎市橘通東2丁目10番1号　電話:0985-26-7099　FAX:0985-26-7327

公益財団法人 みやざき観光コンベンション協会
〒880-0811 宮崎市錦町1番10号　宮崎グリーンスフィア壱番館（KITENビル）3階
電話:0985-26-6100　FAX:0985-26-6123

神話のふるさと みやざき　検索

Facebook「神話のふるさと みやざき」

宮崎を舞台に繰り広げられる神話から歴史へと続く国づくりの物語。



宮崎市・みそぎ池

七一二年（和銅五年）、元明天皇の命により、太安万呂が編纂した日本最古の歴史書・古事記。
上・中・下の全三巻から成り立ち、そこには天皇の系譜や事績、神話などが記されている。
中でも上巻に記される宮崎を舞台にした神代の物語は、「日向神話」と呼ばれ、
今もなお宮崎の地には神々がいた面影を感じる。
江戸時代の国学者である本居宣長は古事記を「よくよみ見るべし」と語った。
頭で読むのではなく、全身で読む。神話の舞台に立つことでこそ、
本当の意味で古事記の世界を感じることができるのかもしれない。
古事記の物語は、その後、奈良大和王権へと続き、現代へとつながっている。
宮崎からはじまる遥かなる国づくりの物語。それは、日本の原点そのものかもしれない。

古事記のはじまりは「国生み」の二神・イザナキとイザナミが地上界を創ったことからはじまる。二神からは多くの神々が生まれたが、その途中でイザナミは命を落としてしまう。悲しみのあまりイザナキは黄泉の国まで追いかけるも、イザナミの変わり果てた姿に驚いて逃げ帰り、宮崎市に残る「みそぎ池」で汚れた体を清める禊を行ったという。その際、イザナキからはアマテラス、スサノオ、ツクヨミなど世界を治める姉弟神が誕生した。

そのむかし、神々の手により生まれた国に、闇が訪れる。

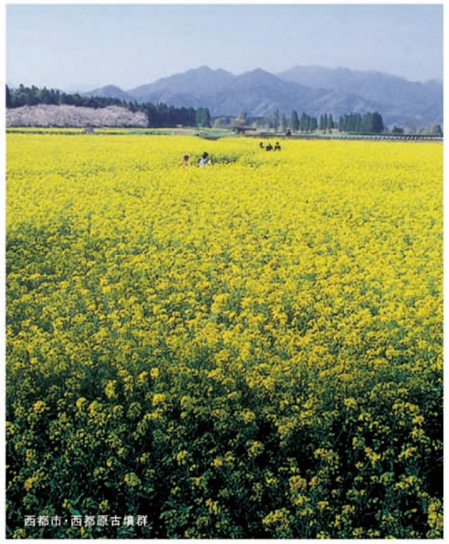
高千穂町・天安河原

イザナキから生まれた姉弟神の物語の一つ「天岩戸神話」の舞台は、宮崎県高千穂町といわれている。ある日、スサノオの乱暴に困り果てたアマテラスが天岩屋に閉じこもってしまう。太陽神であるアマテラスが隠れてしまったため、世は闇に包まれて、厄災が起こり始める。困り果てた神々は事態解決のために相談をし、一つの作戦に出る。アマテラスが隠れる天岩屋の前で、祝詞を上げ、踊り、笑い声を鳴り響かせた。そして、不思議に思ったアマテラスが顔をのぞかせるのを見計らい、手を取り外へ引き出したのだった…。こうして、アマテラスが岩から出てきたおかげで、闇に包まれていた地上界と天上界に再び、光が満ちていった。光を取り戻した神々が相談した場所が高千穂町にある「天安河原」。木々に囲まれた谷あいに巨大な入口を持つ洞窟があり、中には社と一面に石積みがひろがっている。川の音だけが静かに聞こえる幻想的な時間の中で、そっと目を閉じてみれば、神々の声が聞こえてくるようだ。

アマテラスの孫であるニニギノミコトが地上を治めるために、天界より降臨したとされる地は宮崎県内に二説ある。一つは「天岩戸神話」が伝わる高千穂町。夜神楽で知られる山あいのこの町にも、様々な神々の物語が今もなお、人々に語り継がれている。そして、もう一つが宮崎県高原町にそびえる標高約一五七三メートルの「高千穂峰」。冬には雲海が広がり、神聖な空気に包まれる山頂には、天逆鉾が突き刺さる。ニニギノミコトが「鉾をふるうことのないよう」と国家の安定を願い突き立てたものだという。時を経てもなお、堂々と突き立つその姿を見ていると、神代から続く悠久の時が、確かに今に続いているのだと感じる。

宮崎市・青島神社

延岡市・神さん山

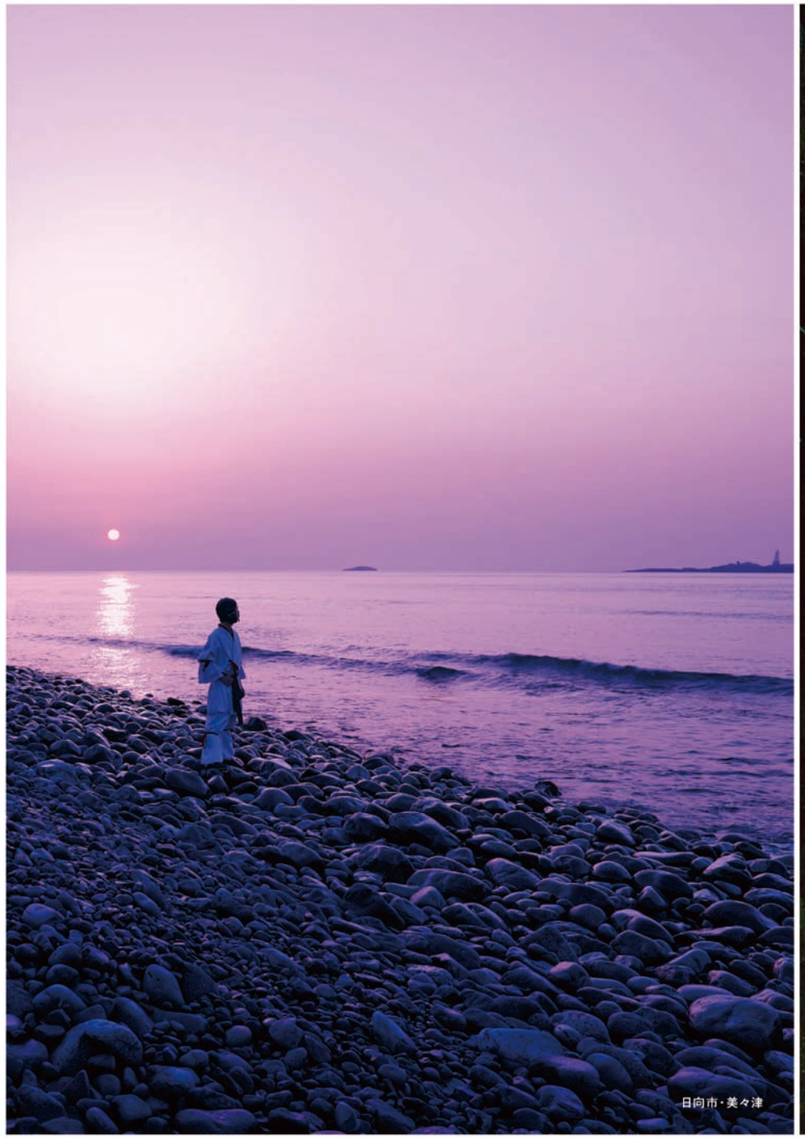

西都市・西都原古墳群

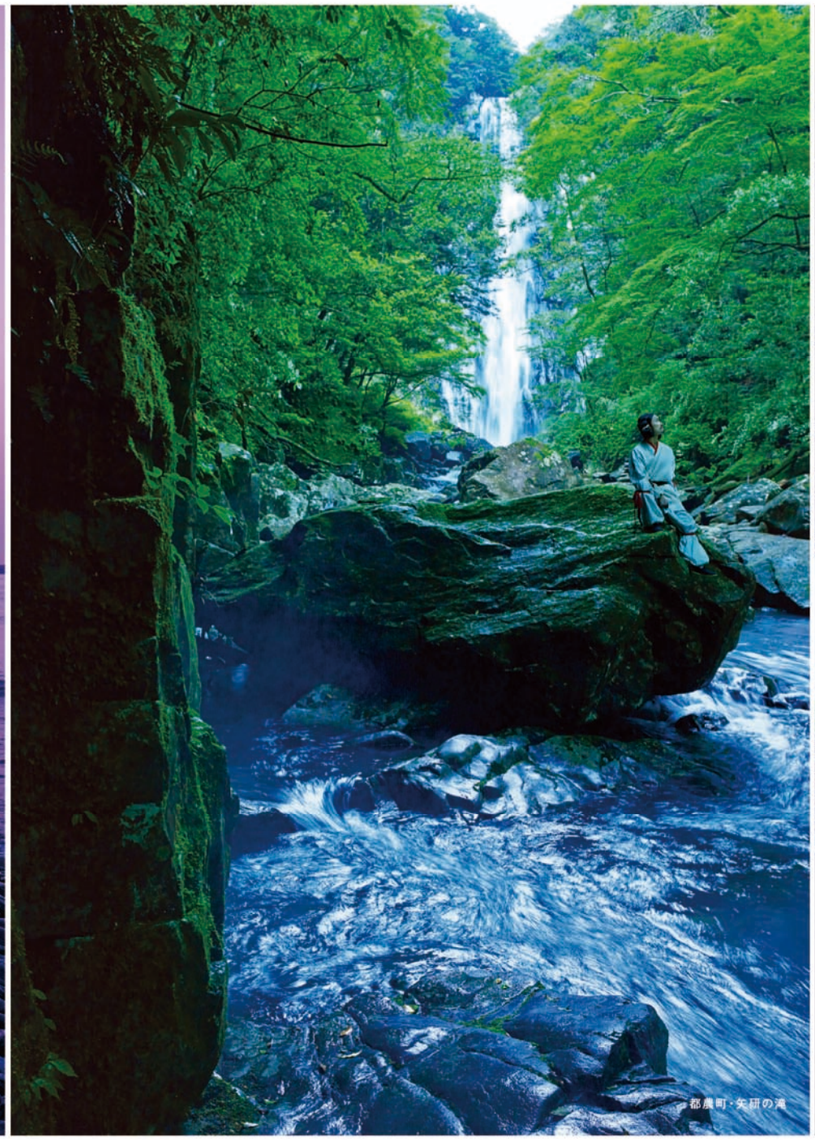
争い、出会い、結婚…
日向で交差する
海と山の神々の運命。

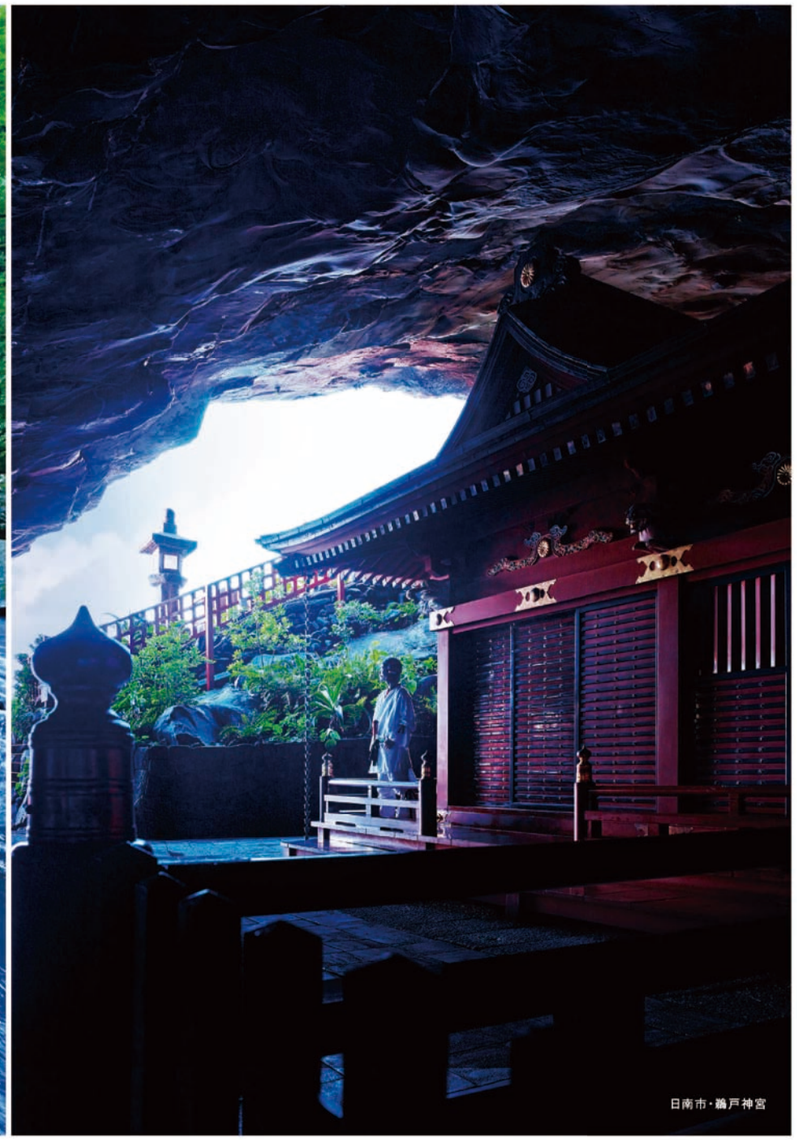
地上に降り立つたニニギノミコトはある日、コノハナサクヤヒメという美しい娘と出会い、求婚をする。その出会いの場となつたのは西都市の西都原古墳群といわれている。コノハナサクヤヒメの父はニニギノミコトに姉も差し出すが、返されてしまう。父は激怒し、「命が長く続くように差し上げたのに、これで花のように儚いものになつてしまつた」と呪いの言葉を残して去つていつた。こうしてニニギノミコトの寿命は神よりも短いものになつたという。

結婚後、ニニギノミコトはコノハナサクヤヒメとの間に二人の子をもうける。海の魚を獲ることが得意な海幸彦、山の獲物を獲ることが得意な山幸彦。地元住民によると、山幸彦は宮崎県延岡市の「神さん山」に住んでいたとも伝えられている。現在の神さん山は、深い緑に囲まれており、山道を奥へと進んでいくと、目を見張るほどの巨岩の岩屋が現れる。悠久の時間が刻まれた雄壮なその姿には、思わず感嘆の声が漏れる。

そんな豊かな山で育つた山幸彦は、ある日、海幸彦に借りた釣針を失くしてしまう。たくさんの針を作つたものの、海幸彦は「元の釣針を返せ」の一点張り。途方にくれていたところに出会つたのが、後に妻となる娘・トヨタマヒメとその父・ワタツミだつた。ワタツミの宮に迎えられ、トヨタマヒメと結婚して何年か経つたころ、釣針を見つけた山幸彦は一人、海幸彦のもとに帰ることにした。釣針を返す際、ワタツミの助言通り不思議な呪文を唱えると、日に日に海幸彦は貧しくなつていき、心が荒み、山幸彦を攻撃するようになつた。山幸彦はそんな海幸彦に向かい、不思議な二つの玉の力により見事、勝利し、海幸彦を従えることとなつたのだつた。山幸彦はその後「青島」で暮らしたという。まるで森が海に浮かんでいるようなこの島は、かつては聖域として一般の人々の人島を堅く制限していた。人目に触れず、長い間守られてきたこの島の中には山幸彦とトヨタマヒメを祀る青島神社がある。


日向市・美々津


都農町・矢研の滝


日南市・鵜戸神宮

山幸彦が龍宮城を去って、しばらく経ったある日、身ごもった妻・トヨタマヒメが訪ねてくる。山幸彦は、トヨタマヒメのために海岸に鵜の羽で葺いた産屋をつくり、やがて二人の子であるウガヤフキアエズノミコトが生まれる。その地こそ日南市にある「鵜戸神宮」だといわれる。目の前に海が広がる急な階段を下った先に洞窟があり、そこにウガヤフキアエズノミコトが祀られている。静寂な洞窟内の本殿の前に立つと、まるで胎内にいるようなトヨタマヒメの愛情を感じる。古事記には記されていないが、本殿の後ろにはトヨタマヒメが自らの乳房をちぎって貼りつけたと言われる「お乳岩」がある。出産の際、トヨタマヒメはワニと化した姿を山幸彦に見られてしまったため、一人、海に帰ってしまった。語り部となった人々が子どもを残して海へ去る母の辛さを想い、その「お乳岩」の話を後世に伝えたのだろう。神話とその土地に住む人々のつながりの深さを感じる。

時は流れ、ウガヤフキアエズノミコトの皇子であり、後の神武天皇となるカムヤマトイハレビコが生まれる。皇子にゆかりの地は、県内のあちらこちらにあるが、宮崎市の「皇宮屋」や「宮崎神宮」もそのひとつである。ある日、皇子は兄弟たちと話し合い、平安に政治を行う場所を求めて、東の大和の地を目指すことを決める。皇宮屋を出発した一行は、道中にある「矢研の滝」で矢を研ぎ、軍を整備し、食糧を貯えた。そして、出航の地として選んだのが日向市にある「美々津」だった。日をうかがい軍船を準備したが、風向きや潮の流れが変わったので予定を変更し、夜中に突然の出発が決まる。あまりに突然だったため、カムヤマトイハレビコの旅の衣服のほころびも立ったまま縫われたといわれる。そして、カムヤマトイハレビコを乗せた船団は美々津沖にある七ツ礁と二ツ礁の間を抜け、東へ旅立ったのだった。現在も美々津の各家庭で、カムヤマトイハレビコのために急ごしらえで作られたという「つきいれ団子」を食べる風習が残っている。遠い神話の時代から、船出の物語は脈々とこの地に住む人々によって受け継がれている。

カムヤマトイハレビコが長い旅路を終え、ようやく東征を果たすころには、同行していた多くの仲間を失ってしまったが、カムヤマトイハレビコの手により見事、大和王権が樹立された。

宮崎に残る数々の神々の足跡。それは、日本という国が形づくられていく中で繰り広げられた神々の、そして当時を生きた私たちの祖先の営みの記憶そのもの。神武天皇が出発した美々津に立ち、海を眺めてみれば、そこには神々が夢見た世界の続きが広がっている。

国づくりの旅が
はじまり、
そして神々の物語は、
さらに続いていく。